

J O F I 東京通信

第 8 号 2020 年(令和 2 年)1 月 6 日発行
<http://www.jofi-tokyo.org/>

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌

目次

内水面の釣りにおいてもライフジャケットの着用を！	1
会長 鈴木 伸一	
中深海釣りの魅力	3
渡邊 好章	
東京湾マアジ釣紀行	4
小田野 紀芳	
公認釣りインストラクター受講のススメ	5
入稻福 佳寿巳	
2019 年釣り交遊録	6
本村 慧介	
WFFC2019 オーストラリア タスマニア大会.....	8
鈴木 等	
サケの調査釣り.....	11
小松澤 誠一	
河川・災害・魚釣り.....	13
石井 利明	
2019 年度活動実績	14
編集後記	15

内水面の釣りにおいてもライフジャケットの着用を！

会長 鈴木 伸一

『小型船舶(漁船)のライフジャケットの着用について、国土交通省が所管している「船舶職員及び小型船舶操縦者法施行規則」が一部改正され、平成 30 年 2 月 1 日以降、原則すべての乗船に義務づけられました。』(水産庁HP「ライフジャケット着用義務拡大について」<http://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/attach/pdf/anz-en-43.pdf>より抜粋。)

また、海上保安庁の資料によると、ライフジャケット着用者の海中転落時の死亡率は非着用の場合に比べて約半分となっており、ライフジャケットの着用は命を

守るためにも現状では最良のツールと考えられている。

一方、内水面に目を向けてみても、ニュースに載ることは少ないものの、毎年のように多くの河川で釣人の水難事故は発生しており尊い命が失われている。アウトドアにおいてはすべてが自己責任の世界であり、法的には未だ規制されている訳ではないが、釣り人は自発的にライフジャケット着用を意識すべきではないだろうか？

(1) 釣りで使用されるライフジャケットのタイプ

- ・膨張式: 首掛け型、ウェストベルト型のものがあり、それぞれ自動式、手動式のものを用意されている。
 - 共通した特徴は
 - ①ジャケット自体が薄くて動きやすい
 - ②保管場所の省スペース化
- などが挙げられる。



首掛け型はコストの面で優れているが、自動式のもの装着した上に雨具、防寒具と言ったものをその上に着用してしまうと、川を渡渉する際などに運悪く水感知のセンサーが作動してしまうことがあり、急激に胸が圧迫されるので注意が必要である。このようなことは決して笑い事ではなく、油断すると往々にして発生するものである。

ウェストベルト型は作業性に優れており、上半身に着るものに制限を与えない優位性がある。

なお、自動式は不意の落水でパニック状態に陥ったり気を失ったとしても 100%機能すると思いがちである。ところが、自動膨張機能はあくまでも補助装置ということで、万が一作動しない場合は手動式と同じようにヒモ

を引く必要がある。メーカーは落水時に必ず膨張することを保証していない。



手動式は水感知のセンサーがない分コスト面で優れており、手軽に洗うことが可能、機構が単純なことから誤作動の心配がないメリットがあるものの、不意の落水でパニック状態に陥ったり気を失ってしまった場合には着用していたにもかかわらず機能しないデメリットがある。

- 固型式: 浮力体入りでそのまま水に浮く。構造が簡単でコスト面、安全面に優れている。ただし、保温性があるため冬季から春先にかけては重宝するが、暑い時期には不向き。また、保管する際に場所を取る難点がある。



(2) 内水面の釣りに適したライフジャケット

ライフジャケットと一口に言ってしまうと、様々なタイプのものがあり、予めそれぞれの特徴を知っておかないと必ずしも快適な釣りにつながらない。

(1) で記した各タイプの特徴から私的ではあるが、内水面の釣りに適したライフジャケットとしては、冬場から春先にかけては固型式、夏場から晩秋にかけては膨張式(手動式)のウェストベルト型を薦めたい。

なお、ライフジャケットを着用していれば常に安全と言うのではなく、その機能を知った上で、まずは危険なところに近付かないことが大前提である。

(3) 膨張式ライフジャケットが作動すると



膨張式ライフジャケットが作動しても、うつ伏せになってしまったのであれば窒息しかねない。予め作動したときの形状を知っていれば、いざという時に慌てることはないはずである。

(4) 膨張式ライフジャケットを作動して分かったこと

ライフジャケットの型番などにより気室の膨らみ方はそれぞれ異なるようで、事前に自分が所有しているライフジャケットはどのように膨らむか知っておくといざと言う際に慌てることがない。例えば長年使用していないと、気室の折れ目が捻じれていたり固着していたり、着用者自ら手を加えてやらないと上手く膨らまない場合がある。

また、傷などでエア漏れしていたのでは着用していても長時間浮いていられない。

予めエア(炭酸ガス)抜きの方法、畳み方を知っておく必要がある。取扱説明書だけではなく、ライフジャケット本体にもその方法は記載されているが、慌てているとその記載があることすら気が付かない。また、記載があることに気が付いても字が小さく苦勞することもある。

その他、膨脹装置の寿命、救命胴衣本体に関する交換時期の目安などは取扱説明書に記載されているので頭に入れておくのは言うまでもなからう。

そのようなことから、自分が所有している膨張式ライフジャケットに関しては、事前に自ら動作確認してみるか、予め画像などで確認しておく必要性を痛感させられた実体験であった(勿論、定期的な動作確認も必要である)。

中深海釣りの魅力

渡邊 好章

中深海とは、およそ 80m から 250m 程の水深を言います。

アカムツ、黒ムツ、アラ、キンメ、沖メバル、鬼カサゴ等、食べてもおいしい高級魚がターゲット。



中でも鬼カサゴ 80m から 200m 程で比較的浅い水深を狙います。

使う道具は 2m 前後のオモリ負荷 80~200 号で 6 対 4~7 対 3 の竿に中型電動リール、道糸 PE3~5 号 300m 程を巻いた物が基本です。(船によっては LT の場合も)

仕掛けは、腕長 50cm 程の片天秤にオモリ 80~150 号(船よって違う)をセット。

ハリスはフロロカーボンの 6~8 号、むつ針 17~20 号、親子サルカンを使って 2 本針か 3 本針で全長 2m 前後。(仕掛け図を参照)

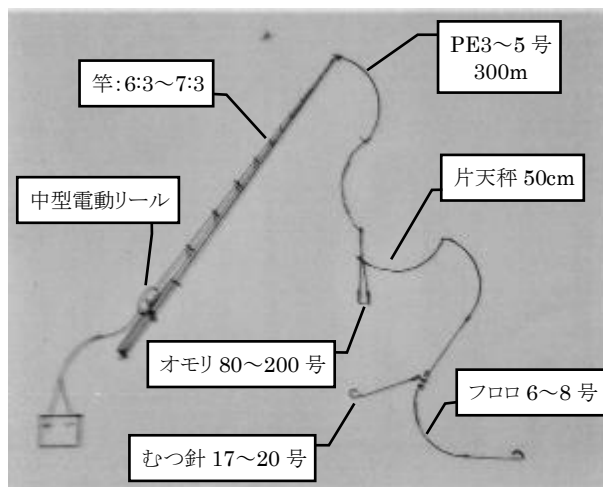
釣り方はオモリが着底したら糸ふけを取り竿先が水面に成る様にハンドルを巻き、ゆっくり 2m 程持ち上げ竿先が 50cm~1m 程まで戻してアタリを待ちます。

30 秒程待ってアタリが無ければ、再び着底させての繰り返し。

これが基本的な釣り方ですが、海には波やうねりも有

り複雑な潮流も有ります。

実際に船に乗って、経験を積む事が必要です。



鬼カサゴと言う魚



鬼カサゴとは、フサカサゴ科、フサカサゴ亜科、フサカサゴ属に分類される魚です。

釣りが鬼カサゴと呼んでいるのは標準和名イヅカサゴで、体長 50cm ほどに成長します。

これとは別に標準和名鬼カサゴと言う魚も居ます。こちらは 25cm 程に成ります。

背鰭と鰓蓋に毒のある刺が有るので注意が必要です。特に裁く時には気をつけましょう。

非常においしい魚で市場では活魚として扱われ高価な魚です。

刺身でよし、煮てよし、焼いてよし、特に冬は鍋物が最高です。

北海道、沖縄を除くほぼ全国に分布していますが関

東以南での釣りが盛んです。

水深 80~200m の砂泥底や岩礁が点在する場所に棲み、底か底近くに居て、あまり泳ぎ回らない様です。甲殻類や小魚やイカ等を食べている。

いつも上を見て居ると言われ、上からヒラヒラ落ちてくる餌に反応すると言われ、鯖の切身、鰹のハラス、鮭のハラス、穴子の切身、イダコなど色々な餌が使われます。

身は薄く細長くカットするとヒラヒラと舞い降りてくるので効果的です。

東京湾マアジ釣紀行

小田野 紀芳

Trachurus japonicus/マアジ、浦賀水道の居つきのアジは、特に金アジと呼ばれその味は絶品。

このアジを狙いに、小雨降る 11 月某日、湾奥の柴漁港に釣行。

船宿に選んだのは、アジ釣りにかけては定評の H 丸、同行者は 30 年来の熟年トリオ。

この日の乗船客は、我々 3 人を含み、総勢 7 人。

午前 7 時出港、20 分ほどで浦賀水道の釣り場到着、雨にかすんで横須賀港の自衛隊の船が見える。



気温 9℃、北の風 4m、波高 1m、おまけに雨は本降りに・・・寒い。

かじかむ手で寄せえさのイワシのミンチを 120 号のピシカゴに充填、付けエサはアカタンと呼ばれる 5mm ほどの紅染めのイカ、仕掛けは、天秤、クッションゴム 1.5mm30cm を介し、2 号ハリス 1.5m にエダス 20cm、針はムツの 10 号。

「水深 40m、タナは底から 2m、潮が速いから気を付けてください」との船長の指示。

まずは一投目、底立ちを取り指示ダナでコマセを振るといきなり強い当たり。

この日のために新調した電動リールのスイッチをオン、だが、これがいけなかった、強烈な引きにドラッグが効かずプツンとハリス切れ。

「マダイが食うことがあるから気を付けてね」とは仲乗りさんの弁。

慣れない道具は使いにくく、手巻きのリールに取り換えてリベンジすることに。

この日は魚の活性が高く、投入ごとに本命のアジが当たる。

しかも 30cm オーバーの丸々とした型ぞろい。

水温 18℃ と水温が高いため、むっちりとしたアジが温かく感じる。



10 匹ほど良型のアジを取り込んだ頃、再び強烈な引き込み、ドラッグが滑る、慎重にヤリトリしてタモ取りされたのはきれいな 1 キロ程のマダイ。



しばらくして当たりが遠のき、船は猿島沖に移動、水深はやはり 40m 前後、頻繁な当たりが続き、船内は爆釣ムードに。

その後も釣れ続きこの日のトップは 70 匹余り、平均 40 匹という好結果。

かつて公害によるダメージを受け、死の海と呼ばれたこともあった東京湾、その後の環境整備の結果、徐々に水質がよくなってきているようです。その一方、貧酸素水塊による青潮の発生など、たくさんの問題が未解決のままです。

また、アナゴ、マコガレイ、スマイカといった江戸前の魚種はその数が減少し、代わってメバル、スズキ、マアジ、クロダイなどが逆に増えているようです。

今回の釣行を通しいろいろと考えさせられることができました。

公認釣りインストラクター受講のススメ

入稲福 佳寿巳

「やった～！釣れたよ～～～！！」この一言が自分の事のように嬉しくて、キッズ釣り教室に参加出来て良かった～と幸せになった一日。



私がキッズ釣り教室のお手伝いをするきっかけは、釣具メーカー(株)ハヤブサが2015年4月より立ち上げた「HAYABUSAレディ」に応募した事から始まりました。

目的は女性に釣りの楽しさを伝える事。自身の釣り体験をブログに綴ったり、初心者向け釣りイベントのお手伝いをしているうちに、同社がキッズプロジェクトを開始しました。

歯朶社長の思い～多くの人々に釣りを楽しんでもらいたい。そして多くの感動を体験していただきたい。これらを通して子供たちには「魚を釣って食べる」という行動、そのためのルールやマナーなど、相手の気持ちになって考える能力を自然と身に付けた立派な人に成長してもらいたい～に賛同し、キッズイベントのお手伝いも経験させて頂きました。

役割は多くの子供たちにつりの楽しさと感動をお届けし、加えてマナーやルールを学ぶ場を提供すること。

そのような場で単なる釣り好きのお姉さんとして釣りを教えているうちに、何か講師としての箔をつけるような資格等がないのかと探して辿りついたのが、全日本釣り団体競技会「釣りインストラクター資格試験」でした。

講習2日間後に試験に合格すると、同協会の「公認釣りインストラクター」として認定されます。

釣り人に、健全なレクリエーションとして、あるいはエコロジカルスポーツとしての釣りと、釣り場をとりまく水産資源の保護、自然環境保全の知識を普及させ、釣り技術と合わせ、釣り場での安全確保、釣り場でのルールマナーなどの指導をおこなうことを目的とした活動のための公認資格です。

合格後、運転免許サイズの認定書が送付され、気分は既にインストラクターです。

インストラクター機構に登録すると、釣り場清掃や釣り教室・イベント等、多岐にわたったお手伝いのお知らせが来ます。

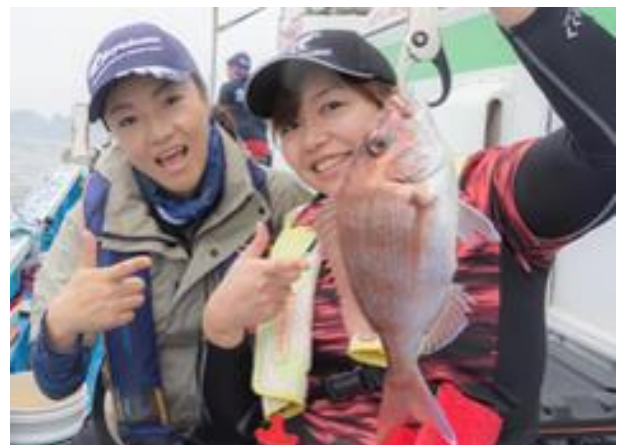
そのような場で釣り人の笑顔を見ていると、関わって本当に良かったと感動すると共に、自身の釣り知識の浅さに反省する場面も多々あり、イベントに参加する度に向上心が生まれます。

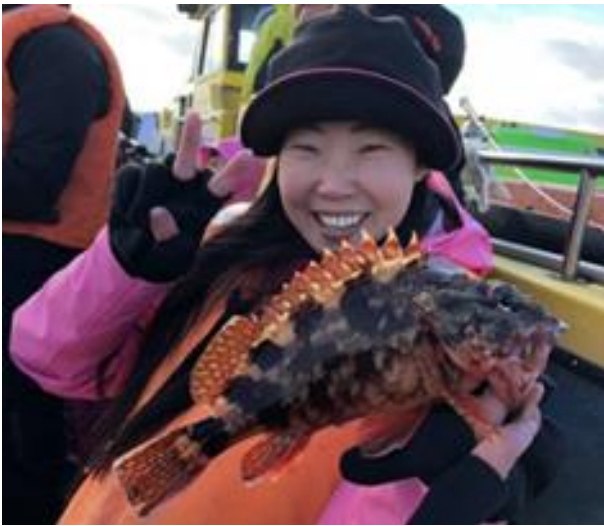
そのような刺激を受けつつ、自身も2018年より(株)ハヤブサのフィールドスタッフとして、より多くの方への楽しさをお伝えする活動が出来るようになりました。

釣りインストラクターのイベントで経験した、釣り場マナーの大切さ等を活かしているのも良い相乗効果となっていると思います。

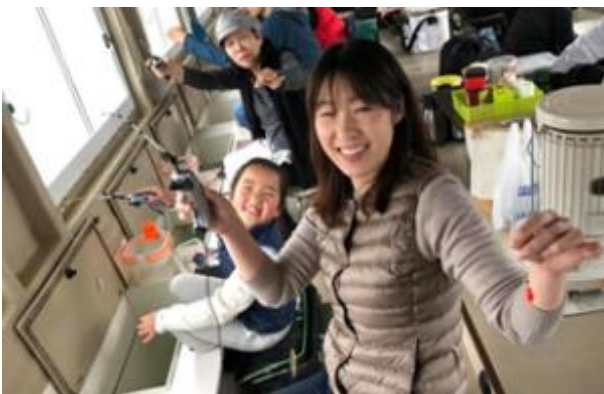
釣り人としては18年、釣りの楽しさを伝える活動は5年目となりますが、活動を通して釣り好きのお仲間にも沢山出会えた事、プロの方と釣行する機会が出来た事、初心者の方と釣り美味しい魚を食べる楽しさを共有出来た事、前より真剣に釣りをするようになってより楽しくなった事、とにかく良かった事満載です。

そして何より、釣りは一生の趣味として楽しめると思えます。





先日も孫・子・祖母という親子三代でのワカサギ釣り体験を開催しました。今後も釣りインストラクターとしての活動を通して多くの方に釣りの楽しさを提案できればと思います。



皆様も一釣り人からステップアップしてみても如何でしょうか。

2019年釣り交遊録

本村 慧介

2019年も色々な方と様々な釣りをご一緒させていただいた。すべてという訳にはいかないが、その一部を以下に紹介させていただきます。

2019年1月6日 東山湖フィッシングエリア

2019年の釣り初めは釣り人生で初めてとなるエリアトラウトとなった。声優やアングラーとして皆様お馴染みの菅原正志さんにお誘いいただき東山湖フィッシングエリアへ。1か月後に開催される仲間内での大会のプラクティスである。

開始直後は真冬の低水温のためか活性が低く苦戦したものの、日が昇り水温も上昇したのか徐々に活性も高くなり日没までニジマスやイワナ、ブラウントラウト等がポツポツと釣れ続け楽しませてくれた。人生初の管釣りで普段殆ど扱うことのない軽量のスプーンやクランクベイト、バイブレーション、ジグ等のキャストにも慣れることが出来、非常に有意義な一日であった。翌月の大会本番でも終了間際に良型のブラウントラウトを釣り上げ4位入賞。色々と教えてくださった菅原さんありがとうございました。

2019年1月18～20日 ジャパンフィッシングショー @パシフィコ横浜

2020年からは『釣りフェスティバル』に名称が変更となり『ジャパンフィッシングショー』としては最後の開催となった2019年、初日と二日目はマス釣り体験のサポートを、最終日は西伊豆町のブースのお手伝いをさせていただいた。初心者から腕に覚えのある子供達の真剣な姿に毎回とても癒される。また、一年に一度だけここでしかお逢いする事が出来ない人もいるし、この会場ならではの素敵な出逢いもあるこのイベントは毎年非常に楽しみにしている。これからも何らかの形で参加し続けたいと思う。

2019年2月21日 駿河湾バラムツ・アブラソコムツ

tailwalkの中村宗彦氏にお誘いいただき、日頃から釣行を共にしているyoutuberと沼津からバラムツ・アブラソコムツ釣りへ。TV等で観て「こんな大物釣りもあるのか」と他人事のように眺めていた釣りにまさか自分が挑戦することになるとは。

船中ファーストヒットでいきなり同船していたtailwalkのスタッフさんの強靱な専用ロッドをへし折っていった深海魚の強烈なご挨拶！直後に自分にも最初のヒット。数秒のファイトの後、リールがロッドからもぎ取られ(?)魚もハズレてキャッチはお預け。バラムツ恐るべし。

その後もコンスタントにアタリは出続け、時にキャッチ出来たりバラシたり。最後は youtuber が推定 40kg の大物を仕留めて非常に盛り上がった釣行となった。全員腕がパンパンになったのは言うまでもない。



2019年4月13日 駿河湾タイラバ

実は恒例行事となっている沼津での女優・秋吉久美子さんとの釣り。いつものように tailwalk の中村宗彦氏に船の手配からタックルの準備等全てお任せして駿河湾へ。今回いつもと違ったのは日焼け厳禁のため夜釣り専門だった秋吉さんが初めてのデイゲームに挑戦したことである。写真のように完全防備で釣り開始。潮が早くて底をとるのに苦戦していた秋吉さんのアテンドを中村氏にお任せし、ミヨシの一番良い場所で釣らせていただき自己記録となる 65cm3.2kg の大鯛をキャッチ。夜釣りの帰りは閉店しているお店もこの日は開いていたので皆で海鮮丼を食べて帰京。大満足の釣行となった。



2019年7月13日 芦ノ湖ショアバスフィッシング大会

日頃海釣りでお世話になっている alphatackle の柳沢輝夫氏からお誘いいただき、7月13日に開催された上記大会に youtuber らと参加。普段海釣りがメインの筆者にとって今回のブラックバス釣りも人生初体験

の釣りであった。もともと興味は持っており是非やってみたかった釣りであったので良い機会を得たとばかりに入門用のタックルを購入し、日頃から芦ノ湖をホームにしている youtuber の仲間達と現地で合流した。



初めてのベイトリールでのキャストに苦戦し、予備で持参していた安物のスピニングタックルをメインに使用。大会前に放流があったおかげで序盤に初バスをキャッチ。釣ったタイミングが良く、後日放送された釣りビジョンの番組内に映り込んだ。しかし後が続かずこの一尾で終了となった。上位入賞者は放流魚を避けネイティブの大物を狙って釣り分けていたとの事。ビギナーズラックでどうにかなるような大会ではなかった。しかし協賛が非常に多く、参加賞を全員ドッサリ貰って大盛り上がりうちに大会は幕を閉じた。芦ノ湖には今後も通いたいと思う。

後に芦ノ湖周辺は台風の被害に遭い、漁業も観光業も相当な被害を受けた。一緒に大会に参加した youtuber の芦ノ湖の被害を伝える動画も TV 番組で取り上げられた。被害に遭われた方々には心よりお見舞い申し上げます。何とか復興を遂げ、ブラックバスの大会も再開され、前出のいつもお世話になっている tailwalk 中村宗彦氏が自身 2 度目の NBC 神奈川 CHAPTER の芦ノ湖年間チャンピオンに輝いたことは非常に嬉しい事であった。

2019年5月11日 若洲海浜公園クリーンアップ作戦

1月のジャパンフィッシングショーで知り合ったさかな芸人ハットリくんが『1か月間、漂流物から作った釣り具で釣った魚以外、食べないチャレンジ!』という企画を実行中とのことで、我々 JOFI 東京が毎月第2土曜日に若洲海浜公園で行っている清掃活動にお招きして一緒に午前中にゴミ拾いと午後からは釣りをした。

GW 明けという事もあってか、吸い殻や仕掛け等の小さなごみが多数。釣り針等の危険な物も多く目につき、毎回残念に思う。

午後からの釣りでは我々もハットリ君と同様に再利用可能なラインやオモリ、釣り針等をこれまた落ちていた木の枝に結んでイソガニ釣りに興じた。いわゆるサイトフィッシングという釣りなのだが、餌の磯に付着していた貝にすぐにアタックしてくるものの、岩に必死にしがみつくと「餌は手放させずに岩からは足を離させる」というのはなかなかテクニカルで時間を忘れて熱中してしまう程であった。道具から餌まで全て現地調達であった訳で、これが本当の“手ぶらでフィッシング”というものなのかもしれない。それにしても釣り場のゴミ問題は残念の一言に尽きる。ある特定の場所に集中しているゴミは一人の人間の仕業か、「既に捨ててあるからいいだろう」と次々に複数の釣り人が捨て続けた悪循環の結果だろうか。いずれにしても“ゴミは各自で持ち帰る”という事を徹底し、釣り場を守り続けて欲しいと願うばかりである。

2019年11月4日 みうら・みさき海の駅 船上釣り教室&漁師の女将ランチ

以前から所属タレントの釣り指導を請け負っている芸能事務所から今年も17歳と19歳の新人女性アングラー(候補)の育成を依頼され、三崎フィッシャリーナ・ウォーフらりと釣り具メーカーのYAMASHITAによる上記釣り教室に事務所スタッフと19歳の朝陽れなさんと参加。乗船代、レンタルタックル代、エサ代、更には沖上がり後のランチまで付いて、料金はなんと2,000円というお手軽さである。



座学として釣り全般における基本的な事柄や船宿の予約方法、最初に用意すべき物等、今回の釣りに関する事だけでなくこれから釣りを始めようとする人にとってありがたい内容の講習から始まり、2船に別れて船上で今回のターゲットとなるカワハギの釣り方、餌の付け方等のレクチャー、そしてポイントに移動しての実釣、帰港してからのランチと実に盛りだくさんの内容で釣果もまずまずと素晴らしい釣り教室であった。釣り教室を担当したYAMASHITAさんのスタッフの方々のサポートも巧みであり、公認釣りインストラクターとして指導者側

に回る機会も多い筆者にとっても大いに参考になるものであった。勿論若い女性との釣りがいつもより楽しかったことは言うまでもない。冗談はさておき今後もこのようなイベントに積極的に参加し多くの事を吸収していきたい。



誌面の都合上、泣く泣く割愛した釣行も多数。しかしこうして振り返ってみると2019年はエアトラウトにバラムツにブラックバスにヤリイカに、と初めての釣りにいくつも挑戦していることに改めて驚く。そして良く言えば「偏らず広範囲に」、悪く言えば「一貫性がなく無節操に」実に色々な釣りを楽しませていただいている。これからは自らも釣りを楽しみつつ、釣りの楽しさを伝え、釣り場及び周囲の環境の保全、マナー向上の啓蒙活動を続けていきたい。

WFFC2019 オーストラリア タスマニア大会

鈴木 等

2018年のイタリア大会に続き、2019年のWFFC(ワールドフライフィッシングチャンピオンシップ)オーストラリアタスマニア大会に参加しましたので、その様子をお伝えします。

この大会はオーストラリア南東部の都市メルボルンから飛行機で一時間程のところにあるタスマニア島で11月30日～12月7日に全世界から23か国が参加して開催されました。

タスマニア島は、北半球でいえば北海道の緯度で、面積は北海道より一回り小さい島です。

気温は夏でも30度を超えることはまれで快適で過ごしやすい島です。

島の中央部はハイランドと呼ばれる標高1000mを超

える高地になっており、そこに水力発電用の水を貯めた無数のダムがあります。

タスマニアは水力発電だけで島内電力を賄っており、余剰電力をオーストラリア本土に供給もしています。



(WFFC2019 HP より)

タスマニア島では 1964 年にイギリスから持ち込まれたブラントラウトが島内の川や無数にあるダムに放され野生化しました。

現在も自然再生の野生ブラントラウトのみで魚影の濃さを維持している川や湖が多数あり、釣り人にとっては天国と言える島です。



(WFFC2019 HP より)

大会は島北部の都市ローンセストンを中心に開催され、競技会場(セクター)にはハイランドにあるペンストックラグーン、ウッズレイク、リトルパインラグーンの 3 つの湖と、ミアンダーリバー、マージャーリバーの 2 つの川が選ばれました。

どの湖、川も魚が豊富なタスマニアを代表するトラウトウォーターです。



湖は全体的に浅く水深 1~2m のところが多く、深い湖でも 3~4m 程です。

例年 12 月初旬はメイフライ(かげろう)のハッチが始まる季節で、ドライフライやイマージャーフライでの好釣果が期待できる釣り場です。

大会の仕組みや競技の方法についての詳細は割愛させていただきますが、大まかには 5 名の選手全員が一人ずつ 5 セクターで各国選手と競い、延べ 25 回の競技(セッション)を行います。

各セッションでの 23 か国中の順位が得点なり、その得点の総合計でチーム順位を競います。

日本チームは母体となっている WFFJ(ワールドフライフィッシングオブジャパン)からの選手 6 名(1 名はリザーブ)、マネジャー 3 名の合計 9 名で構成し、私はキャプテン兼リザーブとして参加しました。

選手 6 名は過去に大会経験のある 4 名とフライフィッシング経験豊かな初参加の 2 名です。

この 1 年の間に関東、東北、北海道で延べ 10 回ほどの合同練習も行い、入念な準備をし、気合たっぷりで大大会に臨みました。



欧州の強豪国は 2~3 週間前からタスマニア入りし、ハイランドのコテージで合宿しながら連日練習をしていました。

日本チームもそれができればよいのですが、休暇をとるのが難しく、何とか大会開始 2 日前にタスマニア入りして湖 1 日、川 1 日の練習を行いました。

事前にタスマニアのガイドから釣り場の特徴や効果的なフライ、釣り方等の情報を収集して準備していましたが、例年に比べて気温が低いせいかメイフライのハッチはあまり見られず、準備していった釣り方やフライで思った通り釣ることができませんでした。

加えて、大会期間中の天候の悪化が心配されました。それというのも、天気予報が大会競技期間中に季節外れの大寒波がタスマニアを襲うと伝え始めたからです。

初夏なのにハイランドの天候を吹雪と予報し始めたのです。

選手全員が天候悪化の心配をしつつも、大会は盛大なパレード、開会式、オープニングディナーといった一連のオープニングイベントで開会しました。



パレードの沿道では大勢の市民が声援を送ってくれ、開会式にはタスマニア州知事も来賓出席し、州を挙げてのサポートを実感しました。

また、一連のオープニングイベントでは他国選手とも交流ができ、皆気分も高揚して大会競技に入っていました。



そしていよいよ競技開始。

高まる気持ちとは裏腹に心配が現実のものとなり天候は大荒れとなりました。

ハイランド地域の風速は時速 50km (現地では風速を時速で示します、50km は秒速約 14m に相当) にもなり、しかも吹雪、瞬間最大風速は 20m を超えます。

湖一面に大きな白波が立っていました。

普通であればとても釣りをする天候ではありません。

それでも大会競技は実施され、完全防寒に身を包んだ選手がボートに乗って競技に出てゆきました。

期待したメイフライのハッチはあるはずもなく、皆がシンキングラインでのウェットフライでの釣りとなりました。

エンジンを止め風に流される(ドリフト)状態のボートから、風下側で釣りをするルールになっているので、強い風に流されたボートでフライラインがどんどん弛む中、フライを泳がせるためにボートのドリフトより早くリトリブする必要があります。

どのボートでも選手がキャストしてはすぐに全身をつかって高速リトリブをひたすら続ける釣りになりました。それでも魚の反応は悪く数匹連れれば良いほうで、ブランク(おでこ)の選手も続出する結果となりました。



川のセクターでは寒さの問題はありませんが、風は強くキャストもまなりません。

ニンフを使った釣りではラインが流されて大きく曲がり、あたりを取るのが難しい状況となりました。



全く想定とは違う釣りを余儀なくされた 5 日間でしたが、日本チームの選手は連日各セクターでベストを尽くして戦いました。

私も 2 回のセッションを正選手に替わり出場しました。

試合の結果は初日が 14 位と好発進し、2 日目には 13 位と順位を上げました。

この勢いで上位を目指そうと、連日夜に翌日の釣り方を練るミーティングも行い、釣れたフライを融通しあって、チーム全員で協力して戦い続けました。

しかし、想定していたコンディションと大きく違っていたことや、後半の釣り場の抽選運が悪かったことも重なり、最終的にはチーム合計で 42 匹は釣ったものの、総合 20 位となりました。

結果には悔しさを感じながらも、全員が持てる力を出し切った 5 日間でした。

競技会場で選手一人ひとりに付いてくれたコントローラー(審判員)との交流を深めたりして、釣り以外に多くの得るものもありました。

私も同世代のコントローラーと意気投合し、今後も連絡をとりあうことにして、国を越えた友人が増えました。

最終日には環境保全のシンポジウムがあり、チーム全員で参加しました。

そこでタスマニアがダムと水生生物、魚類との共存に努力していることを学びました。日本もダムの多い国で、土木水理の話はよく聞きますが、水生生物のことを考えた研究や取り組みは不足しているように感じます。



夕方には大会を締めくくる表彰式が開かれました。優勝はフランス、準優勝はチェコ、3位はスペインと欧州強豪国が占め、優勝を期していたオーストラリアですら7位となりました。

選手にとってこの大会で上位成績をとることは大変な名誉であり、表彰台に上がった国は心底からの嬉しさを体全体で表現しておりました。



その後が続いたクロージングディナーは、500名ほどの大会関係者が一堂に会した盛大な夕食会となりました。そこでは競技を終え気楽になった各国選手が交流して親交を深めました。



こうして深まってゆく世界をつなぐフライフィッシャーのつながりこそが、最も大事なこともかもしれません。

次回の WFFC は 2020 年 8 月のフィンランド大会になります。

フィンランドはタスマニアと同様に湖の多い国で、湖のセクターが多い大会となります。

私は次回の大会のキャプテンもすでに拝命しております。

今回の大会で得たこと、反省すべき点を見直して次回の大会に臨みたいと思います。

WFFC のことをご存じなかったフライフィッシャーの皆さんに興味持っていただければ幸いです。

サケの調査釣り

小松澤 誠一

釣りの話に入る前に、まず、日本におけるサケの取り扱いについて、少々触れておきたいと思います。

内水面(河川や湖沼など)において、漁業関係者以外がサケを採捕(採取や生け捕りなど)することは違法とされ、このことは水産資源保護法の第 25 条に記載されています。

つまり、サケは日本国民共有の食料資源であり、特定に人だけが得をするような行為は許されない訳です。

また、同法の第 20 条 1 項では、農林水産大臣がサケ・マス の 個 体 数 維 持 の た め に 人 工 ふ 化 放 流 に 関 す る 計 画 も 定 め ね ば な ら ぬ こ と が 記 載 さ れ て い ま す。

この計画の内容は、「国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所」のホームページで見ることができますが、「サケ」「カラフトマス」「サクラマス」「ベニザケ」の 4 種類 の 人 工 ふ 化 ・ 放 流 事 業 が、北 海 道 ・ 青 森 ・ 岩 手 ・ 宮 城 ・ 福 島 ・ 茨 城 ・ 秋 田 ・ 山 形 ・ 新 潟 ・ 富 山 ・ 石 川 の 11 道 県 を 対 象 に 実 施 さ れ て い ま す。

さらに、同法の第 4 条では、農林水産大臣又は都道府県知事は、水産資源の保護が必要だと認めた場合、採捕の規制を定めることができると記載されています。

例えば、サケ・マスで有名な北海道では、「北海道のフィッシングルール」という資料が「北海道庁 水産林務部 漁業管理課」から発行されており、この中では「サケ」の他に「サクラマス」「カラフトマス」「ベニマス」「ギンマス」「マスノスケ」の採捕が禁止と定められています。

以上の通り、釣り人は内水面でサケを釣ってはいけません。

しかしながら、何事にも例外というものがあります。

サケに関してもそれは同じで、各漁業協同組合が、サケの個体数やその大きさの調査を目的とした資源の有効利用という場合にのみ、都道府県知事の特別な許可を受けることによって、指定された区域でのみサケの採捕が可能となるのです。

これが、釣りキチの注目の的となっている河川での「サケの調査釣り」です。

現在、インターネット上で確認することができる範囲で、以下に示す河川で調査釣りが実施されていますが、諸事情により休止している河川もあるようです。

北海道：忠類川、茶路川、元浦川、浜益川
 青森県：奥入瀬川
 宮城県：小泉川
 福島県：木戸川、請戸川、真野川
 茨城県：久慈川、那珂川
 栃木県：思川、鬼怒川、渡良瀬川
 山形県：小国川、月光川、寒河江川、鮭川
 新潟県：阿賀野川、荒川、五十嵐川
 富山県：小川
 石川県：手取川

北海道や日本海側の数県では、数週間から数ヶ月に渡って調査釣りを実施している河川も有りますが、多くの河川は土・日 2 日間の実施で、規定人数に到達するまでの事前抽選によって公募が行われています。調査のための参加費用は一日 ¥4,000～6,000 程度が相場のようなようです。

私もこの「サケの調査釣り」に魅了された釣りキチの一人です。

私は茨城県在住なので久慈川か那珂川が近いのですが、所属している釣り団体との縁もあり、栃木県の渡良瀬川での調査釣りに参加させて頂いております。

渡良瀬川でのサケの調査釣りは、毎年 11 月初旬の土・日の 2 日間だけ実施されます。

釣りの時間は 8:30～14:00、参加料は 1 人 1 日 ¥5,000-、釣り方はルアー・フライ・エサで、フックはシングルフックのみ使用可能、漁獲数は 1 人 3 匹までで、雌雄に関係なく持ち帰ることができます。

募集人数は 1 日 60 人まで、応募方法は Fax または Web の専用フォームからのエントリーができ、約 1 ヶ月前から募集が開始されます。



私は、2016 年から参加を始めましたが、やはり、産卵行動に入ったサケを釣り上げることは非常に難しく、どの釣り人も苦戦を強いられます。

比較的釣果を伸ばせる釣り方はやはりエサ釣りで、本流用の長竿を使って魚の着いていそうな場所を広範囲に探るような釣り方ですが、上流で掛けたサケに引きずられて下流に下ってくる釣り師が何人もいました。

次に釣れるのはルアー釣りですが、ルアーの場合はスレ掛かりが多いようで、掛けた後にばらしてしまう姿が何度か見受けられました。

私はフライで挑戦していますが、これが非常に難しく、初年度は終了時間間際によりやく 1 匹釣り上げることができました。

その時使ったフライは 1g くらいある重めの薄茶色のニンフでしたが、漁協の方が「サケもニンフを食うんだねえ～」と驚いていたことが印象的でした。



2017年は、サケの遡上数、川のコンドーション共に抜群で、どんな釣り方でも良い釣果が出せているようでした。

私自身もお昼過ぎにはリミットの3匹を釣り上げることができ、非常に満足のできる調査釣りができました。



2018年は、猛暑の影響で遡上時期に遅れが出ているのか、全体的に魚影が少なく、調査釣り終了直前に、スレ掛かりで一匹だけ手中に収めることができました。



2019年は、台風19号がもたらした全国各地の河川氾濫による大規模災害の影響が記憶に新しいところですが、渡良瀬川もその例外ではなく、例年とは川の形が大きく変わっていました。

その影響もあってか、はたまた、腕が悪いのか、早朝に掛けた一匹をバラしてしまい、その後も釣果が無いままで終わってしまいました。

「サケ」と言えば食用の魚ですので、持ち帰りが可能ということになれば、当然「味」が気になるころだと思います。

しかしながら、川に遡上した「サケ」は海からの長い道のりを越えてきましたので、かなり体力を消耗しています。

身の色も「サケ」独特の「サーモンピンク」から白っぽく色抜けしていますし、脂の乗りも今一です。

雌のお腹にはイクラが入っているのでは？と思われる

かもしれませんが、ほとんどの雌は産卵を開始し始めているため、生み残しが少しだけ残っているというような固体が多いように感じます。

また、産卵直前のイクラの膜は非常に厚く、噛み潰そうとしても口の中で逃げ回ってしまうような状態になっています。

そうは言っても「サケ」は日本人にとって大切な食料資源です。調理技術の無い私では美味しく頂くことはできませんが、釣り味を楽しむだけではなく、食材としての味も楽しめるように、色々と学ばなければならないと思う今日この頃です。

河川・災害・魚釣り

石井 利明

元号が令和に変わった、この一年も昨年同様に災害が多かった。今年の災害の特徴は台風による水害だ。特に関東を直撃した台風19号は記憶に新しい。関東に住む方々は、長い一夜を過ごした。私の住んでいる地域も、佐野や栃木市の秋山川や永野川が決壊して大きな災害になった。

私は、今回の災害規模を見て、もう何でもかんでも堤防やダムで”抑え込む”という考えは改めなければならない、と実感した。報道の中にも、まだ、少数ではあるが堤防やダムに全面的に依存する河川構造に疑問を呈する方々も散見した。

やはり、数百年の時間軸に沿って考えると、各地に”氾濫原”を設けて、堤防と言う”線”ではなく、出来る限り、”面的”に川と付き合う。そして、越流した際も、出来るだけ穏やかにする、というのが最も現実的で合理的な方法であると思う。

現実には、国交省が想定するダムの寿命は100年ではない。ダムの寿命は、土砂の堆積によって決まる。そのデータも国交省が開示している。最新版は平成28年のデータだ。「全国のダム堆砂状況について(平成28年度末現在)」とワード検索すれば誰でも見ることが出来る。見れば誰でも、多くのダムで国交省の想定以上に土砂の堆積が進んでいることが分かる。

“洪水を抑え込む”という考えを改める潮流は世界各国共通のものだ。

2002年に大洪水に襲われたドイツの関係省庁は以下のように述べている。「川に沿って余りにも多くの構造物が造られていたので、水害を起こさずに洪水を受け入れる余地がなくなっていた。これまで造られてきた“洪水を防ぐ”という全ての構造物(ダムや堤防)が、そこから下流における洪水の危険性を高めてきた。人が住んでいない地域に洪水を受け入れるための遊水地を川に取り戻すために、国家は努力しなければならない」。

「日本には人が住んでいない地域など無いから、現

実的ではない」と考える方々もおられるだろう。しかし、今回、災害から免れた“鶴見川”の事例から学ぶことは多い。少なくとも、遊水地(氾濫原)はダムや堤防と共存できる。



繰り返すが、我が国は洪水を“抑え込む”という河川管理のため、本来、氾濫原になるべき場所に人々が住み、潜在的な危険を作り出している。

数百年の時間軸で考えれば、最終的には遊水地を取り戻すことが人間の生命・財産を守る。と同時に、遊水地は多様な生物の住処ともなる。勿論、そこには多くの魚たちが棲み、魅力的な釣り場にもなる。

災害をきっかけに河川を考えることは、“釣り”を考えることにつながっている。

2019 年度活動実績

日付	活動実績
3/30(日)	ヤマメ発眼卵 BOX 回収&稚魚放流 (JOFI 西東京に協力参加)
4/7(日)	秋山地区豊かな川づくり事業 (ヤマメ釣り指導:エサ、フライ、テンカラ)
4/21(土)	「水辺感謝の日」多摩川浅川クリーン作戦 (JOFI 西東京に協力参加)
5/19(日)	親子マス釣り懇親会 (マス釣り & BBQ)
7/6~7(土・日)	日本マリン事業協会主催 マリンカーニバル 2019 (子供向け模擬釣り体験支援)

7/27(土)	若洲シーサイドパークグループ・(公財)日釣振東京都支部主催 第15回「親子釣り教室」 (釣り指導・サポート)
8/3(土)	ライススマートケア川崎主催 障害者釣り指導 (JOFI 西東京に協力参加)
8/18(日)	全磯連関東支部主催 女性・少年少女ハゼ釣り大会 (釣り指導・サポート)
8/26(日)	アウトドアフィッシングスクール in 若洲 (安全な釣り指導、魚の捌き方指導 等)
9/5(木)	栃木県漁業協同組合連合会 種苗センター見学
10/5(土)	若洲シーサイドパークグループ、(公財)日釣振東京都支部主催 第5回「初心者・ファミリー釣り教室」 (釣り指導・サポート)
11/9(土)	ヤマメ発眼卵 BOX 埋設 (JOFI 西東京に協力参加)
11/30~12/1(土・日)	2019 年度全釣り協公認釣りインストラクター資格講習・試験 (スタッフ・講師を派遣)
1/17~1/19(金・土・日)	釣りフェスティバル 2020 (JOFI 神奈川に協力参加、ニジマス釣りのサポート、JOFI の活動紹介 等)
1/18(土)	釣りインストラクター・マスター研修会 (釣り人専門官の講義)
毎月第2土曜日	若洲海浜公園釣り場における釣り場クリーンアップ、及び釣り指導
3/24(日)	キッズわくわくワーク・
4/27~29(土・日・月)	キッズ本格お仕事体験 (釣りインストラクター紹介、
5/6(月)	ライフジャケットの正しい着
5/12(日)	用法指導、模擬釣り体験支
8/17(土)	援 等)
10/6(日)	

編集後記

本年度は、台風 15 号、19 号の影響による大規模災害が発生し、多くの地域で被災される事態となりました。被災された地域には早期の復興を願うばかりです。

残念ながら、釣り場環境におきましても、同じく大きな変化が訪れる事態となっており、皆さんも今後の状況回復に不安が残るところであると思います。

釣り人一同力を合わせて、積極的に釣り場環の回復に尽力していきましょう！

今回の会報も昨年同様、特にテーマを決めずに執筆者の自由なテーマで原稿作成をお願いしました。

執筆者の皆様、会報発行にご協力頂き有り難うございました。

本会報誌は皆様からの寄稿の様子を見て、適宜特集を組んで発行していきたいと思っています。

原稿は随時募集しておりますので、会員名簿を参照し広報部宛に e メールや郵送などでお寄せ下さい。

原稿の集まり具合によっては期限を設けて執筆依頼をすることもありますので、その際にご協力をお願いします。(広報部)

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌
第 8 号

発効日 2020 年(令和 2 年)1 月 6 日

発行 JOFI 東京
(一社)全日本釣り団体協議会 公認
東京都釣りインストラクター連絡機構

編集 同上(広報部)

URL <http://www.jofi-tokyo.org/>

